

雑がみ掘り起こしへ!

～紙リサイクルを取り巻く課題解決へ向けて～

第1回 紙リサイクルの時代推移と古紙の中長期課題

(公財)古紙再生促進センター
専務理事

川上正智



連載に当たって

全国の製紙会社、古紙問屋、商社などにより形成される(公財)古紙再生促進センターは1974年の創立以来、半世紀にわたり、市民の皆様のご理解の高さや善意、また自治体や紙リサイクルに関わる多様なステークホルダーの方々に支えられ、各時代の懸案に対してさまざまな取り組みを実施し、資源の有効利用や廃棄物の減量化、SDGs推進といった循環型社会の形成に大切な役

割を果たしてきた。

今後は製紙・古紙業界の協働に加えて、これまで以上に広く、市民や自治体を始めとした紙リサイクルに関わるマルチステークホルダーが改善できる技術や意識改革を総動員した全体最適を議論すべき時期にあり、当センターは可燃ごみからの「雑がみ」掘り起こしを始めとした多くの中長期的課題に対して公益的な立場を強みとした連携・協働のつなぎ手としての役目を果たしていく所存である。

今般、本4月号より来春3月号まで12回にわたり、自治体の皆様を始め、多くの関係者の方々に紙リサイクルを取り巻く諸課題についてお示しする機会を頂戴した。今回の連載を通じて一層のご理解をいただき、パートナーシップ拡大を通じて、我が国の持続的な紙リサイクルシステム発展に繋がる機会になればと願う。

日本の紙リサイクル半世紀

当センター創立時の1970年代前後は高度経済成長、大量消費型時代の到来により都市ごみ問題が顕在化。有効な国内資源である古紙を利用する重要性がクローズアップ。紙・

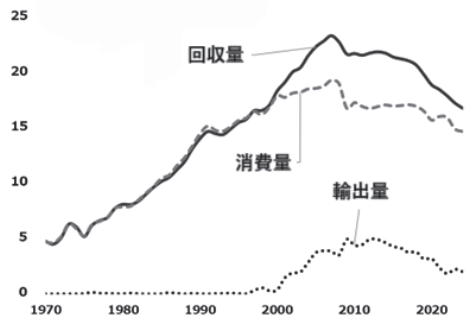
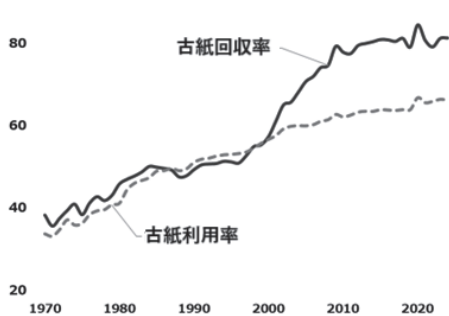
板紙消費が増加する中、古紙量は増加の一途を辿り、古紙回収・利用の両輪がスムーズに回転していくことが求められ、官民一体で循環型社会の構築に向けて取り組んだ時代である。また1990年代後半に表面化した古紙余剰問題は、それまでの国内完結型の需給バランス構造変化のきっかけとなった。

2000年代に入ると回収・消費・輸出が過去最高水準を記録する一方、中国などのアジア向け輸出が増大し、国内古紙需給や品質への影響が強まった。リーマン・ショック以降、古紙消費は減少傾向となった一方、中国の固形廃棄物輸入禁止によつて輸出は減少に転じ、紙リサイクルも循環型経済や環境規制といった新たな側面からのグローバル対応が求められることとなった。

2020年代はデジタル化やコロナ禍に伴う紙・板紙の需要構造変化が加速する一方で、アジア諸国を中心とする段ボール原紙の成長加速により、国際的な資源循環の枠組みも変化し、わが国の紙リサイクルは大幅な転換期にある。2024年の古紙回収率は81・7%、利用率66・6%に達し、世界有数の紙リサイクル先進国となっている。

古紙回収・消費・輸出量(百万t)

古紙回収率・利用率(%)



共創共生
サステナブルチャレンジ2050

創立50年の節目を迎えた当セン



「サステナブルチャレンジ
2050・共創共生」
紙リサイクル・中長期課題
への取り組み

ターは、今後の社会動向をキーワードとして、多くの方々と将来像を共有し、それぞれのお立場で今後の紙リサイクルをお考えいただけるような課題とデータを、「サステナブルチャレンジ2050・共創共生」として昨春公表した。

報告書は「定性的アプローチ」として、社会の潮流変化や循環経済推進の流れなどを踏まえ、紙リサイクルの中長期に亘るリスクと機会を抽出し、未来課題を浮き彫りにすることを目指した。諸懸案を「企業と人が変わる」「環境と技術で変わる」「社会と地域が変わる」の3テーマを軸に、主だった「20」の課題に絞り込んだ。これらの課題は「起こりそう」「起こりうる」と、必ずしも確実に発生することではなく、また機会や課題解決の現実性、難易度、時間軸も異なる。今後の循環型社会形成に向けて、紙リサイクルも「環境・

経済・社会」各側面のバランスを考慮した対応が求められると考える。

今後の古紙需給見通し

「サステナブルチャレンジ2050・共創共生」では定量的アプローチとして、2050年までを見据えた中長期にわたる古紙需給シミュレーションも実施した。

古紙の発生源となるパッケージング用紙¹⁾は人口減・高齢化の影響を受けて長期的に緩やかな需要減少傾向

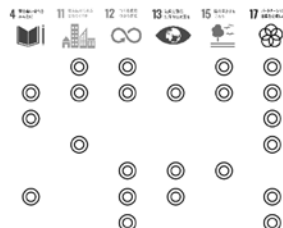
向が続くことを見込む一方、グラフィック用紙²⁾需要はさらなるデジタル化の影響も加わり、大幅な減少傾向が続くと思われる。

これに伴い、雑誌古紙、新聞古紙、模造・色上古紙(グラフィック用紙由来)については発生源であるグラフィック用紙需要の減少が続く中、2020年代半ばから2030年にかけて、古紙の回収量へ消費量バランスに転ずると予測。特に雑誌古紙、模造色上古紙の需給ギャップは中長期的にも拡大が続くこととなる

20の中長期課題と古紙センターの考える紙リサイクルSDGsとの関連性

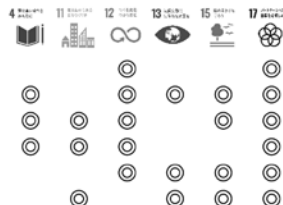
企業と人が変わる

- ① 中長期の紙リサイクルの姿
- ② 雑がみの増加と品質低下
- ③ 労働力の減少と雇用市場変化
- ④ 静脈産業のあるべき姿
- ⑤ 欧米の循環経済(CE) 拡大
- ⑥ 紙製容器包装識別マークのありかた
- ⑦ 紙リサイクル業界の底上げ



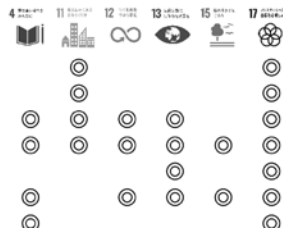
環境と技術で変わる

- ⑧ DX
- ⑨ GX
- ⑩ 脱プラスチック、複合素材の増加
- ⑪ 古紙分別基準のあるべき姿
- ⑫ 難処理古紙用途の多様化
- ⑬ 紙リサイクル目標、KPIのあり方



社会と地域が変わる

- ⑭ 人口・世帯構造変化の影響
- ⑮ 地方自治体の今後
- ⑯ 地域の循環共生圏
- ⑰ ステークホルダーとの認識共有化
- ⑱ グローバル化の中での日本
- ⑲ SDGs・ESGとの関わり
- ⑳ 紙リサイクル啓蒙の将来



る見込み。現状の古紙配合が続いた場合、古紙輸出を抑えても国内消費の充足が困難という前提であり、「雑がみの掘り起こし」や需給状況を踏まえて必要性や経済性に鑑みた原料配合変更が一層求められる可能性がある。

なお、当センター調査では可燃ごみなどに含まれる紙ごみの内、再生可能と思われる「雑がみ」は年間170万t程度と推測、概ね家庭系由来と事業所系由来に二分されるのではないかと見ている。また今後とも自治体の可燃ごみ削減に向けた動きが強まる中で、紙リサイクルを通じて「雑がみの掘り起こし」との連携は、持続的社會づくりに向けて相乗効果が期待できるものと考ええる。

次号では、「雑誌古紙・雑がみの課題」について状況をまとめる。 **W**

【注】

- 1) パッケージング用紙
段ボール箱に使われる段ボール原紙や、菓子、冷凍食品、飲料、医薬品・化粧品や家電・雑貨の箱に利用される紙器用板紙等
- 2) グラフィック用紙
新聞用紙や書籍・雑誌、チラシ、カタログ、パンフレット、コピー用紙等、多様な印刷物や情報媒体に使用される紙等